
完全人間 ~ 不知火仏の一日 ~

東西南北

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全人間 〳 不知火仏の一日 〳

【Nコード】

N0030BA

【作者名】

東西南北

【あらすじ】

世の中には二種類の人間がいる。

「不完全人間」と「完全人間」だ。

「不完全人間」とは世に言う大多数の一般的な人間だ

「完全人間」とは大多数の人間にとって異常で歪な存在がゆえに、社会には適応できない人間たちである。

高校二年生である不知火仏は、「無知全能」という「完全性」をもちながら、社会に適応し日常生活を送っている。そんな彼が送る、異常な平凡と歪な日常の物語。

プロローグ（前書き）

小説を書いたことがないので、稚拙な文章になり読みづらいと思うことが多々ありすぎると思うので、書き方、または内容にご指摘ア
ドバイスがあれば是非言ってください。
感想をお待ちしております。

プロローグ

プロローグ

世の中には二種類の人間がいる。もちろん厳密に分類すればその二種類から更に派生するわけだが、それについては後々機会があれば、詳しく話そうと思う。

話を戻したいと思う。

完全人間と不完全人間。

これが完全人間こと、不知火しらぬいほとけ仏が定義する二種類の人間だ。

そもそも人間とは非常に不完全な生き物だと僕は常々思っていた。ゆえにほとんどの人間、99.9%以上が不完全人間であり、逆に完全な人間というのは、人間という枠から酷く逸脱した、酷く歪で、不快で、恐ろしく、おぞましい特殊な人間であり、ゆえにそのほとんどが、人間社会に適合できず、劇薬という形で、人間社会に混ざり込んでいる。

僕は完全人間でありながらも、運良く僕の完全性は、人間社会に適応しやすく、ゆえにどちらかと言えば不完全人間よりの完全人間なのだと認識している。

だからなのか僕は日常がとても好きだ。

平凡に溺愛している。

ただ作業のように繰り返される毎日こそ至福を感じている。

ゆえに僕の日常を壊す行為を、僕は決して許さない。

だから僕は完全人間が嫌いだ。無意味な破壊行為に酔いしれる不完全人間も同様だ。

だがどんなに異常な不完全人間であっても、そもそも完全人間とは格が違い過ぎる。

奴らは世界にとって、異常であり、生物として歪であるがゆえに、ただそこに存在するだけで、害悪であり、日常を破壊する。

完全人間である僕が、日常生活を謳歌する姿、そんな異常で歪んだ光景を奴らは放っておいてくれるはずがない。

きっと僕の『日常』に混ぜてもらおう為に嬉々としてやって来るだろう。

だから僕はいつらを、視界に入れたくないと思う。

だから同じ空気を吸いたくないと思う。

だから同じ完全人間でいたくないと思う。

だからどこかに存在していると思いたくないと思う。

だから殺したいと思った。

僕はこれから君たちにある話しを読んでもらいたい。

何、そんな長い話じゃないさ。

ちょっとしたライトノベルとでも思って読んでくれれば良いと思う。

これは僕が日常を過ごすための『日常』のお話。

もし君たちが僕の行為を否定して、完全人間を肯定するのならば、君たちはきつと完全な人間なのだと思う。

なんなら僕の日常を壊しにくれば良い。

それでも僕は守り続けるけどね。

前置きが長くなってしまったみたいだね、そろそろ物語を始めようと思う。

それでは、完全人間「不知火仏」の一日の始まり始まり。

放課後の教室（前書き）

導入みたいなもんです。

放課後の教室

僕は自分が嫌いだ。

いや……許せないと言っても過言ではない。

ナルシストという言葉を知っているだろうか。彼らは自分が好きで好きでしようがない人種らしい。

僕はその単語を知ったとき、そいつらを心底羨ましいと感じた。だって自分が好きということほど、幸福なことはないよ。

だってそうだろ？好きな奴と居るとき、人間は最も幸福を感じるのだろ。なら好きな奴と一心同体なナルシスト達は最高に幸せだ。

僕も一度で良いから自分を好きになってみたいよ。

ああー自分を好きな世界ってどんな世界なんだろう。

夢の中の不知火しらぬいほとけ仏が呟いた瞬間、突如彼を呼ぶ声が出て現実世界に引き戻された。

不知火は気分の悪い夢を見たためか、不機嫌そうに、机から顔を上げた。

鋭い目付きに、やや整った顔立ちが、より一層の不機嫌さの演出をしている。

不知火の目の前には、きりっとした整った顔立ちの女の子が、不

不知火の不機嫌な顔にも全く動じることなく、仁王立ちで腕を組み、不知火を見下ろしている。

彼女は迫力を出しているつもりかもしれないが、子猫っぽい雰囲気、顔立ちと、肩まで伸びたポニーテールが幼さを演出しているため、迫力は皆無と言ってもいいだろう。

「完全に寝ぼけた顔しちゃって！もう放課後だよっ、寝る時間じゃないよっ、帰る時間だよっ」

不知火を起こし、矢継ぎ早に話しかける彼女の名は、能登路歩夢のとうみゆむ、不知火のクラスメイトであり、クラス委員長をやっている、明朗快活でお節いな少女である。

不知火に積極的に関わろうとする人物は少ないので、不知火が学内で認識している数少ない人物の一人だ。

「んー委員長……今何時？」

不知火は瞼をこすりながら、気だるそうに話しかけた。

「えーと……午後六時少し前だねっ！というか私の名前は委員長じゃないよっ！歩夢って呼んでって何度も言ってるでしょ！」

能登路はポニーテールをびよこびよこ揺らしながら、冗談半分にもとれるように怒っている。

「じゃあ歩夢さんで……」

(つかもつ六時か、こんな時間まで寝てるなんて……)

不知火は放課後まで昼寝してしまった自分に少しイラついた。

「そういえば、なんで歩夢さんはここに？」

「へっ、私？ちょっとクラス委員長の集まりで長引いちゃってさ！あとね、毎日言ってる気がするけど、明日になったらまた委員長って呼ぶのはなしだよ！分かった？分かったね？分かったよね？分かれますええええ！」

歩夢は突然な質問に少し驚きながらも、能登路節を炸裂させ、不知火に追い打ちをかける。

「分かった分かった。明日からはきちんと歩夢さんって呼ぶから落ち着いて」

不知火はテンションがうなぎ登りで上がる歩夢に圧倒され、少し引き気味だ。

「よしよしっ。分かれば良いんだよっ、ワトソン君。嘘は針千本だからね」

先ほどのハイテンションは嘘かのように、ケロツと平常に戻り、嬉しそうに笑っている。

相変わらずコロコロと表情が変わる面白い奴だなと思いつつ、不知火は机にかけてある鞆を持ち立ち上がった。

「こんな時間だし、僕はもう帰るよ」

「うんっ！私もこれ片付けてから帰るから、先に帰ってて」

不知火は歩夢と挨拶をした後、夕闇に染まる街並みの中、家路を急ぐ。

逢魔時が見せる光景はどこか幻想出来で、現実と切り離された幽世の世界を感じさせる気がする。

その美しさと不気味さを兼ね揃えた街並みから、不知火はなんとなく嫌な予感を感じた。

噂話（前書き）

少し日が空きましたが第三話。
文章のぎこちない感が凄い。

噂話

「ねーねー人喰いジエントルマンって知ってる?」

「えー何それ、なんかの怖い話みたいなやつ?」

「違う違う、最近流行りだした噂だつて」

「うーん、聞いたことないかも。どんなやつ? むしゃむしゃって人を食べちゃうの?」

「食べないって! ていうか人をむしゃむしゃ食べてたら、全然ジエントルマンっぽくないから」

あははは

「話し戻すけどそれでね、その人喰いジエントルマンっていうのはね、ジエントルマンっぽい格好をしててね、夕方この街のどこかに現れるんだって、しかも目の前に突然だつて」

「ジエントルマンっぽい格好つて」

「ちょっとー! 人がせつかく教えてあげてるのに、笑って茶化さないですよ。もう!」

「ごめんごめん、ちゃんと聞くから、ゼヒオシエテクダサイオネガイシマスー」

「なんで棒読みなの……まあいいや、それでね……そのジェントルマンに会った人はね、パツって一瞬で消されちゃうんだって！しかも消された人は、みんなに存在したことを忘れられて、一生そのジェントルマンの奴隷にされちゃうんだって！やばいでしょ！？」

「うーん……会った人消されて、みんなに忘れられちゃうなら噂にならないでしょ、しかも奴隷とかなんか変態っぽいし、どうせ男子が流した噂っぽくない？」

「そうかなー、でもこれすごい流行ってる噂だよ。きっと何かあるんだって」

ここは、不知火と歩夢の所属する2年D組の教室である。現在は休み時間で、どこのクラスでも賑わっている。

普段の休み時間は机に突っ伏して寝て過ごす不知火だが、昨日夕方まで寝過ごした反省からか、今日は窓際にある自分の座席から、窓の外を眺めながら、クラスの話しに耳を傾けている。

現在この学校でもっとも話題になっているのが、人喰いジェントルマンの噂である。

この教室でも、大半の人がその話題で盛り上がっており、いつもなら、このような噂話に興味を示さない不知火も、自分の座席の目の前で、盛り上がるクラスメイトの女子二人の話を聞いているうちに、若干の興味を持ち、ふと違和感を感じた。

(あらためて意識してみると、教室のどこでもこの話題でいつばいだな。こんなに流行っているのに、クラスにも知らなかった奴がちらほらいるし、聖者の中に犯罪者が紛れ込んでるみたいなの、気持ち悪い違和感を感じる)

不知火は話しから感じた違和感について考えていると、背後から突然、背中への衝撃と共に、「えいさっ！」と言う掛け声が聞こえた。

声の主はささっと不知火の目の前に回り込み、「歩夢ちゃんでしたー、どう驚いた？驚いた？」と、相変わらずのハイテンションで、駆けるように不知火に話しかけた。

相変わらず元気な奴だなと、半分呆れつつも返答をする。

「おはよう委員長。凄い驚いたよ、ところで突然どうしたの？」

「あーっ！あーっ！あーっ！また委員長って呼んだ。昨日あれだけ言ったのに！歩夢ちゃんって呼ぶって言ったのに！酷いよ酷いや、不知火君の意地悪っ」

歩夢は頬を膨らめせて、怒った様相で、ふんつと顔を横に逸した。

「ごめんね歩夢さん……ついつっかり……僕って色々忘れっぱく
て」

不知火は申し訳なさそうに歩夢に謝る。

「もう！不知火君は忘れっぱすぎるよっ！アルツなんかだよっ

！いい加減堪忍袋の緒が切れちゃうよっ」

すでに教室での恒例行事となる、この二人のやりとりには、クラスメイトはまたやってると思ひながら、遠巻きに二人の様子を眺めている。

「ほんとにごめんって……」

「メモ」

「えっ」

無言の間を打ち破った歩夢の唐突な単語に、不知火は反射的に声をあげてしまった。

「もう忘れないように、メモするのっ」

「分かった。もう忘れないようにきちんとメモするよ」

人喰いジェントルマンの噂話の影響だろう、忘れるということに對して、少し過敏になっている歩夢は、いつも以上に食い下がる。

不知火は、そんないつもより過敏な反応をする歩夢に、少しばかり疑問を感じながら、おとなしく従うことにした。

『委員長を必ず歩夢さんと呼ぶ』

「メモったよ。ところで歩夢さんは、僕に何の用だったの」

「あつ！そうだった、えつと……大した用じゃないんだよっ、ただ不知火君が昨日遅くまで学校に居たから、帰りに人喰いジェントルマンに食べられなかったか心配で、確認にきたんだよっ」

さつきまでの不機嫌は嘘のように、ビシッと楽しそうに敬礼をする歩夢。

「確認って……教室にいるんだから確認も何も……」

不知火は少し苦笑をする。

「でもほら、話しかけてみたらパツって消えちゃうかもしれないでしょ、念のためだよ」

「念のためって……なんか歩夢さんらしいね」

不知火の笑い慣れていないような、少しぎこちない笑みを見て、歩夢は「私らしいって何よっ」と言いながらも、してやったりと、弾けんばかりの笑顔でその笑顔に応えた。

歩夢の一挙一動は元気に溢れていて、自然と周囲の視線を惹きつける力を持っている。

不知火は、そんな歩夢と話していると、なんとなく楽しい気分になる自分が居ることに、最近気づき、それを悪くないと感じている。

とある理由から、普段は話しかけづらいオーラを纏っている不知火も、そんな歩夢の影響により、この時は普通のなりを潜めて、ごく普通の一般的高校生に見える。

普段から正反対の理由で目立っている二人が、楽しげに話しており、また、容姿が整っている部類に入る二人の楽しげな光景は、少しばかり絵になることから、クラスの視線も自然と集まってくる。

自分たちに向けられる好奇の視線が、すこしばかり多いことに気づいた不知火は、「ちよつと歩夢さん」と、少し慌てたように不知火が話しかける。

「何々、どうしたの」

「歩夢さん、ちよつと周りみて、なんかみんなこつち見ているみたいだよ」

「えっ」

歩夢はすつとんきよんな声をあげて、周囲をキョロキョロと見回す。

クラスメイトは、歩夢の突然の動作に少し遅れながらも、ほぼ同時に顔を逸した。

「気のせいだよっ、誰も見てないよっ」と全く気づいた様子のない歩夢の姿に、クラス一同は、面倒な展開にならずにすんだと、内心ほっとした。

そんなやりとりをしている内に、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り響き、ざわついていたクラスメイト達も、そそくさと自分の席に戻っていった。

不知火は、授業が始まった後も、なぜみんながこっちを見ていたのか考えながら、なんとなく窓の外を眺めていた。

窓に薄っすら写る自分の姿を見て、肩まで伸びた襟足と、右目を隠すように伸びた前髪が気になり、少し鬱陶しげにいじり始めた。

不知火は、髪の毛と格闘しつつ、授業時間いっぱい考えたが、結局その理由はどれもの外的なものばかりであった。

放課後の出来事 1

放課後になり、夕方というにはまだ少しばかり明るい街中を、歩夢と、仲の良いクラスメイトの三人で歩いている。

「そういえば歩夢は、いつも神様にちよっかいかけてるけど、何？もしかして好きなの？」

突然振られた予想外な話題に、歩夢は少し焦る。

「えっ、えっ……未来ちゃん突然すぎだよっ、神様って不知火君だよ、んー……どうなんだろ、好きってまだよく分からないだ。なんだか知らないけど、モヤモヤってした、気になるみたいなのがあつて……うーんよく分からないっ」

どうやら本当に分からない様子の歩夢の姿に、もう一人のクラスメイトが「歩夢はまだまだお子様なんだね」と言つと、歩夢は「そんなことないもんっ、未来ちゃんと、絵里ちゃんえりのバカー」と頬を膨らませ、その姿を見て二人が笑いながら歩夢に謝つた。

「そういえば前から思ってたんだけど、歩夢って神様怖くないの」

「あーそれ私も思ってた」

未来の質問に絵里も乗っかかる。

「へっ、なんで不知火君が怖いのに」

二人の質問の意図が歩夢には全く分からなかった。

「うーん、なんていうんだる具体的に何がとは言えないんだけどさ、雰囲気みたいなのかな」

「そうそう、なんかあたしなんか関わっちゃいけないような…
…そう！あだ名みたいに、本当に神様で、私達とは違う存在なんだってみたいなのがあるんだよねー」

未来と絵里はうんうんと二人で頷き合う。

「えーそんなの全然ないよ、話してても、全然変じゃないしっ」

歩夢は不知火を擁護するかのように、少しばかり語気が強くなる。

「でもクラスのみんなも言ってるよー」

「そうそう、折角のイケメンなものにもったいないよね」

二人は本当に勿体無いと思っているのか、少しため息をつく。

「そうなんだ……だから不知火君はいつも一人なのかな……」

歩夢は少し落ち込んだような顔をする。

「でも話してみると全然そんなことないから、未来ちゃんも、絵里ちゃんも今度一緒に話してみよう」

「うーん考えとくー」

「あたしも未来が話すなら」

二人はどうも乗り気にならない様子。

「じゃあ近いうちだねっ」

そんな二人の返事を気にした様子はなく、歩夢は不知火もクラスにもっと馴染められたらいいなという思いでいっぱいであった。

不知火に関する話が終わり、その後も三人がごろごろと話題を変えながら帰り道を歩いていると、チャラそうな大学生くらいの男性三人組が歩夢たちに声をかけてきた。

「ねー君たち、俺らと遊ばない」

「うんうん、絶対に楽しいから一緒に行こうよ」

「おっ、すっげー可愛いじゃん、もしかしてモデルとかやってない」

三人組が歩夢たちの通行を遮るように、思い思いに話しかける。

歩夢たちを驚きと恐怖から、怯えるように、半歩ほど後ろに下がった。

「これから用事があるんで、無理です、ごめんなさい」と歩夢は勇気を振り絞って断ろうと試みる。

「そんなつれないこと言わないでよー」

「そうそう、絶対楽しいし、全部奢るから」

「つかもう決定でしょ」

しかし三人組は断られようが関係ない様子で強引に三人を連れていこうとする。

歩夢たちは、誰か助けしてくれる人がいないか辺りを見回すと、不知火が自分たちの方に向かって来る姿が見えた。

「不知火君、誰か人呼んできてっ」

歩夢はすぐにも助けると叫びたかったが、不知火の身を案じてか、その選択ができなかった。

しかし不知火は歩夢の言葉を聞き入れず、更に歩夢たちの方へと進み、三人組との間に割って入ってくる。

三人組は女の子をゲットしたと思った矢先、突如現れた邪魔者に、殺意が沸いた。

「お前なんだ、ぶっ殺されたいのか」

「あーウゼ、こっとう奴まじウゼって、殺しちまおうぜ」

「ボッコボコにして、全裸で土下座させようぜ」

三人組は自分たちの優位性を信じて疑うことなく、怒りと愉悦の表情を浮かべる。

不知火は、そんな三人組の怒りの炎に油をそそぐように、威圧感

のこもった声で「邪魔……消える」と言い、睨みつけた。

三人組は一瞬何を言われたのか理解できず、あっけらかんとした後、怒りのあまり、ゲラゲラと下品な声で笑い出した。

「マジウケるわー、こいつ死にたいって言ってるぜ」

「死にたいって言ってるんだからボランティアでぶっ殺してやる
うぜ」

「やつべ、こいつアホ過ぎて涙出てきた。そこの路地裏がいいっ
しょ」

「よし路地裏けつてーい」

男の一人が、路地裏に向かって歩き出す。

もう一人が不知火を連れて行こうと、胸ぐらを掴んだ時、不知火
に対して違和感のようなものを感じた。

「お、おい、ちょっと待てって。なんかこいつおかしくねーか」

男は突如沸いた、言い知れぬ不安感からか、どつと冷や汗をか
いた。

「なんだよ、全然変じゃねーから、そんなガキにビビってねーで
早く連れて来いよ」

男は不知火から感じた、なんとも言えない不安感を抱いたまま、
不知火を引っ張って行く。

「しっつ不知火君」

歩夢も予想外の出来事で呆然としていたが、連れていかれようとする不知火の姿を見て、駆けつけんがばかりの勢いで声を張り上げる。

「僕は大丈夫だから、歩夢さんたちは、もう少しそこで待ってて」

不知火はそう言うと、男の手を振り払い、率先して路地裏へと足を進める。

「そうそう、君たちはここで俺と待つてようねー、ツレがソッコ
ーあいつをぶっ殺してくつから、その後一緒に行くこうねー」

歩夢たちは、自分たちの代わりに連れていかれた不知火が心配で逃げることもできず、かと言ってどうしていいのかも分からずに、ただ呆然と不知火が連れていかれた路地裏の入り口を見つめていた。

放課後の出来事1（後書き）

次回からは文章や表現が稚拙になると思います。といっても元々稚拙なんです、さらに酷くなると思います。

理由は、色々な書き方に挑戦してみたいということから、とりあえず話をきりの良いところまで描き上げて、その後変な部分、足りないを校正していくってスタンスでちょっとやってみようって思ってるからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0030ba/>

完全人間 ~ 不知火仏の一日 ~

2012年1月15日03時47分発行